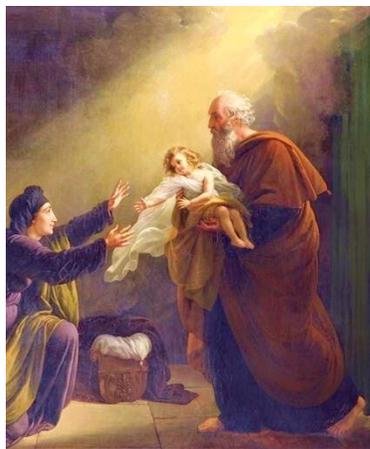




①



②

2020年5月17日 説教「信仰による祈りを用いて下さる主」

列王記第一 17章 17～24節

今朝は第一列王記 17章の先週に学んだ記事の続きから学んでいきます。

1. 思わぬ出来事が生じ (17～19節)

①やもめの息子 (17) 「これらのことがあった後、この家の主婦の息子が病気になる。その子の病気は非常に重くなり、ついに息を引き取った。」 「これらのこと」とは預言者エリヤが、ツアレファテに行った直後の出来事のことです。やもめは一握りの粉とわずかな油だけしかありませんでしたが、パンを作ってそれをエリヤに差し出しました。その結果、やもめの一家は豊かに守られていったのです。ところがです。それからしばらくたった後に、やもめの息子が病になったのです。そして、あれよあれよといううちに、病状は悪化し、なんとついに息を引き取ってしまったのです。

②やもめの問い (18) 「彼女はエリヤに言った、『神の人よ。あなたはいったい私にどうしようとなさるのですか。あなたは私の罪を思い知らせ、私の息子を死なせるために来られたのですか。』 そのやもめはエリヤに、泣き叫ぶようにして問うたのです。「あなたは私になんということをなさるのですか。あなたが来られた目的は、私の罪を思い知らせた上で、大事な息子を死なせるためだったのですか」。彼女が「神の人よ」と呼びかけているのは、決して皮肉ではなく、こんな中でもエリヤに対する尊敬は捨てていないことを示しています。

③寝台の上に (19) 「彼は彼女に、『あなたの息子を私によこしなさい』と言って、その子を彼女のふところから受け取り、彼が泊まっていた屋上の部屋にかかえて上がり、その子を自分の寝台の上に横たえた。」それを聞くと、エリヤはその息子を女性のふところから受け取り、寝泊りしていた屋上の部屋の寝台に横たえたのです。どうやら、エリヤはこの地に、それなりの期間、滞在していたと思われます。神がやもめにエリヤを養うようにしてある (9節) というお言葉が実現していることを示しています。エリヤにとっても、男の子の死は衝撃であったでしょう。しかし、彼はこの事で主の前に出ることにしました。

2. その子は生き返り (20～22節)

① (20) 「彼は主に祈って言った、『私の神、主よ。私を世話してくれたこのやもめにさえもわざわいを下して、彼女の息子を死なせるのですか。』 エリヤは切実に激しく祈りました。主よ、この家の女性の所にはあなたご自身が導かれました。お言葉通り、彼女は私の世話をしてくださっています。にもかかわらず、その息子の命をお取りになって、この女性にわざわいをくだされるのでしょうか、と。

神を信じる信仰を与えられた時でした。

- ②エリヤの祈り (21)「そして、彼は三度、その子の上に身を伏せて、主に祈って言った。『私の神、主よ。どうか、この子のいのちをこの子のうちに返してください。』」預言者エリヤがシュネムの女の息子が死んだ時に、寝台の上で主に祈り、その子の身の上に身を伏せ、口を口の上に、目を目の上に、両手を重ね合わせて、主に委ねたことがありました (第二列王 4:34)。エリヤの場合も、主の御力を信じ、この子のうちに命(ネフェッシュ・靈魂)がもどるようにと祈ったのです。
- ③生き返り (22)「主はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」エリヤの場合もそうでしたが、主はエリヤの祈りを受けとめて下さり、いのちが男の子のうちに返ってきました。新約聖書でも建物の三階から落ちて死んだユテコという青年の命が、パウロの祈りと介抱で、生かされたことがありました (使徒 20:10)。人間の力ではありません。いずれも、主の御力が示されたのです。

3. やもめの信仰告白 (23~24 節)

- ①その子を抱いて (23)「そこで、エリヤはその子を抱いて、屋上の部屋から降りて来て、その子の母親に渡した。」エリヤは生き返った男の子を見て、主に大いに感謝したことでしょう。そして急いで、その子を抱いて、屋上の部屋から下に降りて、その子の母親に渡したのです。最後の頁の図②をご覧ください。
- ②生きている (23)「そして、エリヤは言った。『あなたの息子は生きてい』る。』」。エリヤは、その子のいのちが、その子のうちに返して下さった主の憐みを覚えつつ、「あなたの息子は生きているのです！」と伝えたのです。失われた命がその子のうちにもどってきている事実。それはエリヤにとっても喜ばしいことでした。また、この女性がいだいた神への疑問を、神ご自身が答えてくださったという証でもありました。
- ③信仰告白 (24)「その女はエリヤに言った。『今、私はあなたが神の人であり、あなたの口にある主のことばが真実であることを知りました。』」このやもめの女の信仰告白です。彼女はエリヤを尊敬し、エリヤの信ずる神を信じようとしていました。そして、大きな恵みも受けていたのですが、息子の命が取られて、その信仰は風前の灯でありました。しかし、息子の命がもどってきたという出来事に経験し、改めてエリヤの前に、i.あなたが神の人である。ii.エリヤの口にある主のことばは真実である。ということ、エリヤの前に告白しました。まさに、異邦人でフェニキヤのツアレファテの地の女性は、見えざる

《結論》 この章に出てくるやもめの素性については、わからないことも多いのです。いつやもめになったのか。どのようなことで夫が亡くなったのかもわかりません。ですから、ここに出てくる少年が何歳ぐらいなのかもわかりません。最後の頁に描かれている絵にある少年ほどには小さくなかったかもしれませんが。とはいえ、エリヤが抱きかかえているとありますから、そんなに大きな身体にはなっていない頃でありましょう。女は飢饉の時に、粉も油も枯渇して、死ぬ覚悟もしていました。ところが、エリヤの到来で、わずかな粉と油を用いてパン菓子を作りそれをエリヤの所に持っていったのです。いわば、主に献げたのです。そのことによりこの女性の家は食べることに於いて、全く困ることがなくなったのです。主の祝福でした。ところが、そのようにして、一度助かった自分と息子の命なのに、愛する息子の命が取られてしまったのです。エリヤの信ずる神は生きていると告白した女でしたが (12 節)、その神のことがわからなくなり、エリヤに対しても不満をぶつけるばかりでした。コロナウィルス感染により、家族の命をとられたご家族も、あつという間の出来事に茫然自失としたことでしょうか。少し前まで、あれほど元気だったのにと。

ヨハネの福音書 11 章にラザロの死とよみがえりのことが記されています。マルタとマリヤの兄弟であるラザロは病により死んだのです。主は「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」(25 節)と言われ、マルタの信仰を確かめられました。主は墓に葬られたラザロに「ラザロよ。出てきなさい」と命ぜられました。ラザロはよみがえったのです。ここにおいては、主イエスがいのちの主であり、よみがえりも与えてくださる主であることが証されています。

一方、列王記におけるエリヤの場合はどうだったのでしょうか。やもめの息子の命が生き返ったことについて、ヤコブの手紙にはっきりと記されています。即ち、「信仰における祈りは、病む人を回復させます。主はその人を絶たせて下さいます。・・・ですから、あなたがたは互いに罪を言い表し、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働く力ががあります」(5:15~16)。エリヤは預言者ですから、特別の力が備えられていたのでしょうか。それについて、ヤコブ書では「エリヤは私たちと同じような人でしたが・・・」とあるように、主イエスとは明らかに違い、私たちと全く変わらず、弱く無力な人間でした。しかし、主はそのエリヤの祈りを用いて、病人をいやし、雨を降らせて下さり、死からの生還も与えてくださったのです。

それでは、主は私達の祈りも用いてくださるのでしょうか。ヤコブ書 5:15 にあるように、信仰を持ち、悔い改めつつ祈る祈りを主は用いてく

ださるのです。癒し主が働いて下さる時に、癒しの御業がなされるのです。病気だけのことではありません。今の時代なら、深刻な経済の問題もあるでしょう。主は信じて祈る祈りを用いてくださるのです。あなたの中に秘めている願いを、注ぎだして祈っていこうではありませんか。